

ものの正しい使い方教育の必要性

靴を正しく使っていますか？

片瀬 真由美

(金城学院大学 生活環境学部)

The Need for Education in Ways of Correctly Using Things, Are you using the right shoes?

Mayumi Katase

(College of Human Life and Environment, Kinjo Gakuin University)

1. はじめに

子どもの育つ生活の中で、もの(人工物)の負う役割は多様であり、子どもの育ちに与える影響は大きい。多くの子ども向けの製品は、子どもの特徴を捉え、子どもに合わせた設計がなされている。しかし、その使い方に関しては、製品によってまちまちな状況である。なかでも、正しい使い方をされないことで、製品の機能を発揮できないばかりか、身体に良くない影響を与える可能性さえある。

今回はその事例として「子ども靴」に焦点を当て、正しい使い方の啓発を行うことで靴の機能性を引き出し正しい歩行や運動を保障すること。子どもの健やかな成長を支えることを目指した「靴教育」の取り組みを紹介する。

2. 日本の子ども靴選びの現状と背景

2.1 日本人特有の靴の履き方の問題

本来、靴ひもは足に靴をしっかりと固定し、歩行しやすくする目的でつけられている留め具である。しかし、日本人の多くは、靴を脱ぎ履きする際に、ひもやベルクロなどの留め具を操作することを面倒がる。手を使わずに足だけで脱ぎ履きする者が圧倒的に多い。

それは、日本古来からの履き物である、下駄と草履の脱ぎ履き文化の影響が大きいと言える。また家の玄関で履き物を脱いで室内に上がる住宅事情の影響も考えられ、日本に靴が伝来して、靴を履き始めた現在の高齢者から、今の子ども達へと、間違った履き方の伝承が行われていると推察される。

つまり、この履き方をすることで、靴の中で足が固定されず、足は前滑りし、前足部が靴先に当たることで、指先や爪が痛められ、変形を生む場合もある¹⁾。このように、多くの日本人が当たり前のように行っている、手を使わない履き方は、足を痛め、変形の原因にもなる履き方となるのだが、このことは、どこでも教えられないことがないため、多くの日本人が知らずに行っていることなのである。

また、大きすぎるサイズの靴を履くことや小さすぎるサイズの靴を履くことによっても同じ障害が起きるが、日本人の多くは、足を測って靴を買う習慣がない。このことによる足の障害の問題も、特に成長期にある子どもの靴に

おいて注視すべき問題である。

2.2 日本の子ども靴選びの現状

このような背景のもと、筆者らは子供靴選択時の意識と機能性に関する認識について、「靴の国」といわれるドイツと、我が国の消費者および教育者を対象に調査を実施した²⁾。

日本の保護者は、幼児靴の選択基準として、脱ぎ履きが速くできることを挙げており、留め具のない靴、手を使わずに簡単に履ける靴を支持していた。また、サイズに関して、「すぐに靴が小さくなるのもったいない」と大きめサイズの靴を選び、1足あたりにかかる金額も「すぐに小さくなり傷んでしまう消耗品である子ども靴には、なるべくお金をかけたくない」という結果が得られた。しかし一方、自由記述欄の回答からは「子どもには良い靴を与えたいが、良い靴が身近な店で売っていない。売っていても高く買えない。」という意見や、「良い靴選びの情報がないため、どのような基準で選んだらよいかわからない。」という意見が多くみられた。また、日本の保育士も、脱ぎ履きが速くできる靴を支持していた。一方、ドイツの小学校保護者を対象にした調査からは、足と靴をしっかりと固定させて履くことが大切であるという認識のもと、家庭で正しい履き方教育が実践されており、紐靴が最も良い靴であるとの回答が多かった。また、子どもも保護者とともに、足のトラブル症状は非常に少なかった。

このように、日本人の靴に対する意識は、良いものを求めてはいるが、何が良くて何が悪いかの情報が得られないために判断がつかず、強い不満を抱えながら靴選びをしていることが推察された。

また、良い靴が売っていないのなら、靴メーカーに手ごろな価格で品質の良い靴を製造販売してもらえれば良いのだが、そう簡単にはいかない。メーカー側としても品質の良い靴を作りたいが、質を高めればそれだけコストがかかるので価格はおのずと高くなってしまふ。これまで安い子ども靴に慣れてしまっている日本では敬遠されて売れない。この矛盾を解くには、たくさん売れることが必要で、そうなれば自然と価格も下げられるはずなのだが、子ども靴の機能性に目を向け、少し高くても買お

うという保護者がまだまだ多くはないのが現状だ。つまり、品質の良い靴がたくさんは売れない現状では、靴の価格は下げられないのである。

3. 靴教育の意義と効果

情報がない、すぐに小さくなるからもったいない、消耗品にお金をかけたくない。これらの保護者の不満を解決するにはどうしたらよいか。また、主人公である子どもたちが健康な足に育つには何が必要か、検討を行い、たどり着いたのが靴教育である。

つまり、買う側・使う側が正しい知識を持ち、適切な靴選びを行えば、子どもの足が守られ、多くの購買者が品質の良い靴を選べば、子ども靴の価格も自然と下がって購入しやすくなる。また、筆者の共同研究者である整形外科医の塩之谷は、日本でも数少ない「靴外来」を開いている。そこに来院する子どもの患者に、誤った靴選びや履き方によって起こる怪我や、足の障害が多く見受けられると報告している¹⁾。

せっかく機能性を考えて作られた子ども靴が数多く履かれるようになって、誤った使い方ですべての足を痛めてしまうのでは本末転倒である。そのことを加味すれば、靴教育には、正しい履き方と、足に合ったサイズの靴選びの知識も必要になる。

つまり、靴教育の対象を以下の三者と定め、それぞれの役割に合った靴教育の方針を定め、現在試験的な実践を試みている。

【子ども自身への靴教育】

子どもは保護者に与えられた靴を正しい方法で履くことで、靴の機能性を十分生かした歩行を獲得し、足の健康を守る技を身につける。

【保護者に向けた靴教育】

保護者は、子どもの靴を選び与える立場である。つまり、機能性を満たし品質の良い靴を選択し、かつ足のサイズに合った靴を購入し、子どもに与える。また、正しい履き方についても知識を持ち、家庭での履き方の定着教育に努める。

【教育者に向けた靴教育】

教育者とは保育士・幼稚園教諭・小中高の教諭を指す。これらの教育者は、品質の良い靴選びの知識、正しいサイズ選びの知識、正しい履き方のすべての知識を総合的に持ち、教育の場では子ども達に正しい履き方を指導・実践させ、保護者への啓発活動を担う。

4. まとめ

以上のように、人間工学の新たな役割として、作られた製品を正しく使う方法を教える「靴教育」に着目して、活動を展開している。実際に、幼稚園や保育園、小学

校や中等教育学校などで、子ども自身への靴教育として、紙芝居や靴教育絵本などのツールを使った啓発、中高生には靴の授業、また、保護者向け講演会や教職員向けの研修を実践しているが、子ども達には一度教えるだけで正しい履き方は理解され、定着させることができている。また、保護者は、「今までこのような情報を待っていた」「子どもの足の健康を再認識し、靴選びや正しい履き方を今後は家庭で実践したい」という意欲を示している。教職員は、「その後の保育や教育の場面ですぐに生かすことができる、子どもの足の健康を守る知識が得られてうれしい」と感想を寄せている。

つまり、これまで人の健康や生活の質を高めるために「もの」が担ってきた役割に、使い方を含めた提供の仕方までを含めて人間工学が扱い、人間工学が作り手と使い手の間を埋める役割までを担うことまで、視野に入れていくべきであると提案したい。



図 1. 正しい方法で靴を履く3歳児

5. 参考文献

- 1) 塩之谷香他:「不適切な靴が原因と考えられる成長期の下肢障害」, 靴の医学,22(2),83~88,2008.
- 2) 片瀬眞由美他:「子供靴選択時の意識と機能性に関する認識—日本とドイツの消費者および教育者の比較—」, 平成15年度~平成16年度科学研究費補助金 研究成果報告書,2003.

本研究は、科学研究費 基盤研究(C)一般 (課題番号 21610025) によった。

【連絡先】

片瀬眞由美

金城学院大学 生活環境学部 環境デザイン学科
〒463-8521 愛知県名古屋守山区大森 2-1723

e-mail : mkatase@kinjo-u.ac.jp

Fax : 052-7983-0180 (片瀬研究室宛)

ものの正しい使い方教育の必要性 靴を正しく使っていますか？